10/12

統一へのアピール
10.12
NO.53
全学連支持会議機関紙

羽田における一部暴力学生集団の挑発行動を断固糾弾する全学連中執が声明を発表

（一）

十月八日、佐藤首相は、右翼は日本人民の反対の声をふりきって、南ベトナムを中心とする東南アジア諸国への第二次訪問に出発しました。佐藤首相のこのたびの「外遊」は、アメリカのベトナム侵略戦争が泥沼におちいる中で、東南アジア諸国を「ラコ入れ」するとともに、日本をいっそうふかく侵略に加担、協力させるためのものです。

全学連は、すべての民主勢力とともに、このような「外遊」に断固抗議してきました。六日には、首相官邸に四百名の各学生自治会代表が抗議にいき、全民主勢力が共同してひらいた「佐藤首相の南ベトナム訪問反対、10・21闘争の成功をめざす中央集会」には、二千をこえる学生が結集し、堂々とデモ行進をしました。さらに八日には、東京、神奈川を中心に全学連の代表団は、民主勢力とともに、きびしい警官隊の警備体制のなかで、羽田空港の送迎デッキにのりこんで抗議行動をおこないました。

このように佐藤首相の南ベトナム訪問に抗議する学生と民主勢力の闘争がたかまるとともに大きくもりあがってきたとき、その前進を妨害するため「三派全学連」「革マル全学連」と称する一部暴力学生集団は、「佐藤訪ベト実力阻止」を呼号し、挑発隊との「衝突」をくりかえし、ついに京大生一名を死にいたらしめるという事態をひきおこしました。

「中核派」「社学同」「社青同解放派」「革マル派」などと称する一部の学生集団は、これまで常習的に挑発と分裂の行動をくりかえし、すでに大勢の学友からみはなされ、あいてにされなくなって、すっかり孤立してきていました。

かれらは、こうした孤立をなんとかばん回しようとして、「十・八羽田実力闘争」に期待をかけ、各大学で必死の策動をつづけてきました。そして全国から職業的な暴力集団やそれにあおられた一部学生を東京にかき集め、法政、中央大、早大に各派ごとに泊まりこみ、ヘルメット、角材と石ころで「武装」し、羽田に突入したのです。

かれらは、羽田空港手前の弁天橋、穴守橋、鈴蘭橋などで機動隊と「衝突」し、工事現場から盗んだ鉄棒やハンマーなどで道路のコンクリートをたたきわって投石し、警備車七台に火をつけ、うばった警備（給水）車で突入を試みました。こうしたとき一人の学生が死亡し、（つづく）